令和３（２０２１）年度　御船町立高木小学校　学校便り

高き志【こころざし】

目指す学校像
地域とともにある
勢いのある学校

No. 25（R3. 11. 18発行）文責 校長 福田雅也

悔いのない毎日を…

野口雨情は「七つの子」「あの町この町」「赤い靴」「青い目の人形」「十五夜お月さん」等、たくさんの名曲を作詞しています。

♪　シャボン玉消えた　とばずに消えた
　　生まれてすぐに　こわれて消えた
　　かぜかぜ吹くな　シャボン玉　飛ばそ　♪

これも野口雨情の作品です。野口雨情はなかなか子どもに恵まれませんでした。やっと、その願いが通じて男の子が産まれました。雨情はうれしくて、急いで病院にかけつけたのですが、その男の子は産まれて数時間後には亡くなっていたそうです。
その悲しみを歌った歌が「シャボン玉」だそうです。
この歌ができた背景を知れば、雨情の気持ちに共感できますし、歌詞の意味の深さ、命のはかなさも感じます。

実はこの時期になると、毎年思い出すことがあります。それは、５年前の出来事で、私が教師になるきっかけを作ってくださった恩師の早すぎる死です。命日が１０月末なので、この時期になるとどうしても思い出してしまうのです。今の時代としてはまだまだお若い７０歳での旅立ちでした。具合が悪いことは伺っていたので、その年の６月頃に一度お見舞いに行き、亡くなられる数日前にも、私と同様にその先生を慕っていた同級生３人とお見舞いに行ったばかりでした。
その先生は、中学校の部活動（バレーボール）を指導していただいた恩師でした。穏やかな雰囲気でありながら厳しい指導をされ、朴訥で真っ直ぐな心をお持ちの先生でした。しかし、バレーボールの指導となると、厳しさが増し、当時のことですから何度ビンタを打たれたことか、数え切れません。（もう、時効でしょうから書きますが…）ただ、バレーボールの時に限らず、その先生の前では、なぜか背筋が伸びるのです。存在だけで生徒の気持ちが引き締まる、そんな力をお持ちだったのです。それは、生徒のことを本気で考えてくださっていることが伝わってきていたからかもしれません。心を見透かされているような気持ちにもなっていました。
私はバレーボールの指導も含め、こんな先生になりたいと思い、体育教師を目指したのです。
お見舞いに行ったときは、ベッドで動けずに寝ておられたのですが、私たちのことは分かっていただけたようでした。かすかな笑顔も見せていただきました。私たちが中学生の頃は、力強く大きかった手を握りながら「先生の教えを大切にしながら、今頑張ってます。」と声を掛けるとかすかにうなずいていただいたように感じました。

私にとって、この先生の死は大変大きなショックでした。それとともに、上の「シャボン玉」の歌でも触れた命のはかなさは、威厳のある強く大きな存在であっても、避けて通れないものであることを痛いほど感じました。
それだけに、悔いのない毎日を精一杯生きることの大切さを改めて強く感じる機会ともなりました。
「私がこの恩師の先生に対して思っていたような感情を、私に対して持ってくれている子がいるだろうか。」「私は、この恩師の先生のように、教え子の人生に影響を与えるような存在になれているのだろうか。」そんなことを自分自身に問いかける機会にもなりました。

毎年この時期になると、この恩師の先生の教えを大切にしながら、「悔いのない毎日を精一杯生きよう」と、改めて肝に銘じるのです。